

(Thai), Jacob (Khmer), Johns (Javanese), Kuiper (Munda), Kähler (Indonesian), Luce (Danaw), Li (Kam-Sui), Lopez 2 編 (Tagalog; Philippine languages), Milke (New Guinea), Milner (Austronesian), Morse (Rawang), Nguyen-Dinh-Hoa (Vietnamese), Okell (Burmese), Pinnow (Munda), Pulleyblank (Sino-Tibetan), Roolvink (Malay), Robins (Sundanese), Shorto (Mon), Simmonds (Tai), Teeuw (Old Balinese), Thompson (Vietnamese), Uhlenbeck (Javanese), Wurm 2 編 (Australian), Zide (Munda).

(三谷 恭之)

“Thai Nooi” (pseud.) *Prasopkaan 34 pii heeng raboob prachaathipatai*. Bangkok: Prae Pittaya, 1965. 664 p.

匿名の政治評論家「タイ・ノイー」の筆はいつになったら衰えるのか。かれの著作の数は、もう30冊になるはずだ。人民党革命の直後から、新聞編集のかたわら、政治評論の仕事を続け、主として Prae Pittaya 書店を発行元に、精力的に書きまくっている。かれの生命力が長いことは、二つのことを物語る。一つは、民衆がかれの評論を支持していることである。もう一つは、「タイ・ノイー」自身が政治の観察と政治評論の仕事に、心から情熱を燃やしていることである。しかし、かれの本名を知っているひとはあまり多くはない。それでいいのだと思う。

本書は、その「タイ・ノイー」の最新の本である。題の意味は、民主主義時代の34年の経験と訳せよう。人民党革命後の歴史、すなわちタイの現代史を、「タイ・ノイー」なりに捉えた本だとすると、それだけで読者の興味をひくことだろう。それともう一つ、もうそろそろタイ人の手になるそのような民主主義時代史が噴出していい頃だから、その先鞭をつける意味でも、本書の刊行は意味深い。

しかし、残念ながら、ある面では、読者は期待を裏切られることだろう。なぜなら、これは、実はかならずしも首尾一貫した歴史の本ではないからだ。この34年のあいだの重要なできごとを、エピソード的に取り上げて解説しているだけの本である。内容の迫力も、かつての力作「10人の総理大臣」にはる

かに及ばない。そして、やはり、サリットの評価はまだ遠慮しているので、興味が半減する。

本書は、それでもいくつかのメリットをもっている。第1のメリットは、フラー・ソン・スラデートの再評価をうながしている点である。ソンは、ピブーンに憎まれた悲運の政治家である。ピブーンによってたいへん悪いイメージを作り上げられてきた。かれがはたして、ピブーンがいうほど悪人であったか、そして、人民党内序列第2位という実力、人民党革命の作戦担当者としての功績などは、改めて高く評価されねばならないのではないか。ピブーン研究の反面に見逃せない人物だけに、本書が、ソンの人となりを描きだすためにかなりのページを割いているのは貴重である。

第2のメリットは、自由タイの正確な評価を試みている点である。自由タイは、たくさんの系列にわかれた地下運動であり、ややもすると、自由タイ運動の全貌が捉えられない傾きにあった。とくに、ネート・ケーマヨティンが自伝風に自由タイ運動を描いてよく読まれたために、かれの描く自由タイ像がすべてと解される傾向も強い。本書が、X-O グループという集団に着目し、チャムカッドという人物の動きを自由タイの中心的系列として追っているのは、その点注目されねばならない。もっともこの点は、タイでは、しだいに常識化しているが、欧米のタイ研究は、まだよく掴んでいない点である。

このような問題提起に接すると、「タイ・ノイー」がタイ政治史の生き字引といわれる事実の正しさをまざまざと感じさせられる。冒頭の、人民党革命が民主化のトレーガーとしては失敗だったということから話を始める芸当も、ただものではできないことだ。一読してけっして損はない本である。

(矢野 暢)

Guy Hunter. *South-East Asia: Race, Culture & Nation*. London: Oxford University Press, 1966. xix+190 p.

本書は、ロンドンの Institute of Race Relations があたらしくはじめた世界民族問題研究シリーズの第1弾である。著者の Guy Hunter は、イギリスでは、アフリカ問題の権威として知られているが、